

教 育 研 究 業 績

2022年5月1日

氏名 江澤 恭子

学位 教育学修士

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
文学・言語学・地域研究	英文学・英語圏文学・英語教育一般・ヨーロッパ・オセアニア	
主要担当授業科目	イギリス・アイルランド文化研究、オセアニア文化研究、Journal Reading、ホームステイ英語、英語通訳、英米文学研究、資格英語、Reading 他	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1. 教育方法の実践例		
2. 作成した教科書・教材		
3. 教育上の能力に関する大学等の評価		
4. 実務の経験を有する者についての特記事項		
5. その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 する 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1. 資格、免許 1) 中学校専修教員免許 (外国語) 2) 高等学校1種教員免許 (外国語)	平成元年3月 平成3年3月	
2. 特許等		
3. 実務の経験を有する者についての特記事項 1) イギリス留学 2) 「ISA 留学センター」勤務 3) 「日本国際交流振興会」勤務	昭和62年8月～ 昭和63年8月 平成3年5月～ 平成4年3月 平成4年4月～ 平成5年3月	文科省からの奨学金によりイギリス・エクセター大学に国費留学。イギリス文学を専攻。 旅行業務全般・留学代行業務全般・ホームステイ研修添乗など。 学生・生徒の交換留学斡旋や姉妹校提携などの業務に従事。本学国際交流委員会における短期研修や半期留学などの「送り出し」に当たる部分を担当。
4. その他 1) 更新講習	平成21年度より	免許状更新講習制度開始初年度から「英語」の講習を担当

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文)				
1. Characters and Images in Virginia Woolf's Novels (修士論文)	単著	平成3年3月	東京学芸大学大学院 修士課程 英語教育専攻	ヴァージニア・ウルフの小説における両性具有について、存在の瞬間・精神的成長・同性愛などの側面とともに分析した。
2. A Study on Virginia Woolf's <i>To the Lighthouse</i>	単著	平成6年3月	東京成徳大学研究紀要 第1号	ヴァージニア・ウルフの『燈台へ』において、主人公ラムゼイ夫人と燈台の役割を比較分析し、登場人物3人とラムゼイ夫人とのそれぞれの関わり方について論じた。
3. 英語発音・発声訓練前後の英語音素の聞き取りの比較について	共著	平成7年3月	東京成徳大学研究紀要 第2号	共著：前田洋文・堤 昌生・今仲昌宏・江澤恭子 英語発音・発声訓練と音素識別テストとの関係その他について、音声分析装置を用いて実験、事前テストと事後テストの得点の差から比較したものである。学生のリスニング能力全体の向上を図るための一ステップとしての資料的要素と言える。
4. A Study on Virginia Woolf's <i>Mrs Dalloway</i> – Moments of Happiness and Androgynous Qualities –	単著	平成7年3月	東京成徳大学研究紀要 第2号	ヴァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』における両性具有について分析を試みた。「ダロウェイ夫人」は、文学における両性具有性について説明がしやすいため、「イギリス文学作品研究」などの授業で取り扱うことが多かった。
5. Imagery and Character in <i>To the Lighthouse</i>	単著	平成8年3月	東京成徳大学研究紀要 第3号	再び『燈台へ』について、イメージと意識の流れという観点から論じた。「意識の流れ」小説の代表的作家としてのヴァージニア・ウルフの作品理解にあたっては、文学系の授業でビデオやDVD などを見せながら講義する形式を取り、わかりやすさを重要視した。
6. Ireland – A Chronology	単著	平成26年3月	「東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部—」第21号	アイルランド共和国の歴史を時系列でまとめた論文である。内容は先史時代から現代にまで至る。イギリスとの関係だけでなくヨーロッパや世界における地位や役割についても考察した。実際に現地に赴き収集した資料や情報に

<p>7. Colours as Represented in <i>Tess of the D'Urbervilles</i> (1)</p>	<p>単著</p>	<p>平成 27 年 3 月</p>	<p>「東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部—」第 22 号</p>	<p>基づく最新のものとして、担当する「イギリス・アイルランド文化史」の授業においても役に立つと思われる。可能な限り写真も掲載し、特に学生にとってのわかりやすさを重視した。</p> <p>トマス・ハーディの小説『ダーバヴィル家のテス』における色の役割について論じた。ターナー・ロムニー・ボニントンの 3 名の画家の絵の色使いを比較し、主人公テスの感情との関係について分析した。ハーディの小説の基本的な背景が「自然」にあることから、色や光や火を使って神秘的な雰囲気を作り出すハーディの手法についても述べ、ハーディとハーディの文学を理解することを目的とする。</p>
<p>8. Colours as Represented in <i>Tess of the D'Urbervilles</i> (2)</p>	<p>単著</p>	<p>平成 28 年 3 月</p>	<p>「東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部—」第 23 号</p>	<p>トマス・ハーディの小説『ダーバヴィル家のテス』における色の役割について論じた。特に赤と黒によって示される前兆や予兆の大半が不幸せなものであることに注目し、ハーディ自身の幼児体験と関連付けて分析した。前年執筆した(1)に引き続きハーディの手法について述べ、改めてハーディと自然との関係を認識し、ハーディとハーディの文学を理解することを目的としたものである。</p>
<p>9. Re-reading “Easter 1916” by W. B. Yeats</p>	<p>単著</p>	<p>平成 29 年 3 月</p>	<p>「東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部—」第 24 号</p>	<p>W. B. イエイツの詩「復活祭 1916 年」を取り上げ、アイルランドのイギリスに対する抵抗について解説した。文学的表現もさることながら、その内容から見て取ることのできる歴史的背景や政治的問題にも触れ、イエイツの考え方・政治的感覚と「詩を書くこと」に対する彼の精神的態度を分析した。この反乱に関する彼の他の作品にも目を向け、一市民として何かを表現する際の彼独特のスタンスを論じた。</p>
<p>10. Symbolism and Mysticism in “The Wind among the Reeds” by W. B. Yeats</p>	<p>単著</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>「東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部—」第 25 号</p>	<p>W. B. イエイツの詩「葦間の風」を取り上げ、彼の持つ象徴主義と神秘主義について論じた。フランスの象徴主義とギリシア神話の神秘主義の影響を受け、主要なシンボルとして 19 世紀終わりまで頻繁に使っていた「薔薇」を 20</p>

11. A Discussion on the New Zealand Short Story (1)	単著	平成 31 年 3 月	「東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部—」第 26 号	世紀に入ってから「仮面」に変更したことに目を向け、新たな詩の領域を開拓したことを評価したものである。 ニュージーランドの短編小説の歴史を概観する試みである。先住民のマオリ人作家による短編小説も取り上げ、それらに対するイギリスを主とするヨーロッパやアメリカ・オーストラリアからの影響について考察した。スタイルによって大きく 4 区分に分けた短編小説のうち最初の 2 区分について論じている。
12. A Discussion on the New Zealand Short Story (2)	単著	令和 2 年 3 月	「東京成徳大学研究紀要—人文学部・国際学部・応用心理学部—」第 27 号	本学紀要前号に続けて、ニュージーランドの短編小説の歴史を概観することを試みた。スタイルによって大きく 4 区分に分けた短編小説のうちの第 3 区分について論じている。
13. A Discussion on the New Zealand Short Story (3)	単著	令和 3 年 3 月	「東京成徳大学研究紀要—人文学部・国際学部・応用心理学部—」第 28 号	本学紀要の前号・前々号に続けて、ニュージーランドの短編小説の歴史を概観することを試みた。4 区分に分けた短編小説のうちの最後の第 4 区分についてまとめている。
14. A Study on W. B. Yeats's Love Poems (1) –With Particular Reference to His Early and Middle Poems–	単著	令和 4 年 3 月	「東京成徳大学研究紀要—人文学部・国際学部・応用心理学部—」第 29 号	W. B. イエイツの Love Poems と呼ばれる詩のうち、特に前期と中期の作品についての分析を試みた。生涯愛し続けた一人の女性への思いが根底にあるものの、政治的・歴史的背景の影響を受けている点に注目した。
(その他)				